



Title	西アフリカの近代化経験とフランス語で書かれたアフリカ文学：セネガルの作家シェク・アミドゥ・カーヌの場合
Author(s)	中山, 千冬
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58291
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【5】

氏名	なかやま ちひろ
博士の専攻分野の名称	博 士（言語文化学）
学 位 記 番 号	第 2 4 1 3 5 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 22 年 6 月 22 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学 位 論 文 名	西アフリカの近代化経験とフランス語で書かれたアフリカ文学—セネガルの作家シェク・アミドゥ・カーヌの場合—
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 金崎 春幸 (副査) 教 授 北村 卓 准教授 小杉 世

論 文 内 容 の 要 旨

本論文では、セネガルの作家シェク・アミドゥ・カーヌの作品『あいまいな冒険』と『寺の番人』に描かれているさまざまな対立のテーマと、それを乗り越えようとする共存のヴィジョンを、作品の構成や記述、描写、登場人物を中心に分析していく。その際、カーヌが自分の作品に関して答えたインタビュー記事も参照することで、作品の成立過程や作家の意図が少しでも分かるようにしたい。そして、シェク・アミドゥ・カーヌが自ら経験したアフリカの近代化をどのように物語っているか、その特徴を明らかにしたい。

第1章では、シェク・アミドゥ・カーヌ自身について解説する。最初に、彼の経歴について述べる。彼は10歳のときに、クルアーンの学校からフランス植民地政府がつくった学校に入り、仏領西アフリカの首都ダカールにあるリセに進学し、さらに奨学金を得てパリに留学した。帰国後は、大臣や国際機関の高級官僚を長らく勤めた。次に、カーヌの出自について、彼が生まれ育った地域とイスラームとの歴史的な深い関係に注目しつつ詳述する。最後に、カーヌが「作家」としての自分自身をどのように考えているかを見ていく。

第2章では、カーヌの1作目の作品『あいまいな冒険』について分析する。

第2章第1節で、小説の出版までの経緯と題名の意味について、カーヌの証言を交えながら述べた後、第2節ではこの小説の構成と内容について説明する。

続く第2章第3節では、1964年から2008年までの、およそ半世紀のあいだに書かれた『あいまいな冒険』に対する主要な批評を、時系列にそって紹介していく。

第2章第4節では、『あいまいな冒険』に描かれた対立のテーマを分析する。最初に、クルアーンの学校と西洋の学校のシステムのちがいに着目する。クルアーンの学校は、知識を蓄積するためというよりも、暗唱するという訓練を通して、スーフィーがめざす自己の消滅と神との合一の境地へ達する奥義を伝えるために存在する。一方、西洋の学校ではアルファベットを習い、知識を教え込まれる。この学校教育のテーマをとおして、西洋とアフリカの文化的対立、そしてそのあいだに立たされた主人公サンバ・ジャロの心の変化を追う。

次に、西洋の覇権に対するジャロべ人の葛藤について、主に登場人物の描写を通して分析する。サンバの故郷は、ジャロベ国である。その国の指導的立場にある登場人物たちはそれぞれに、西洋の学校を受け入れること、すなわち社会が次の世代から西洋化されることに苦悩する。苦悩の原因は、伝統文化の消滅に対する危機だけではなく、物質文化に圧倒されて、神を忘れるのではないかという危機感にもある。

最後に、人間と神との関係というテーマに現れる対立について考察する。それは主に、登場人物のあいだの対

話のなかで展開される。サンバの父とフランス行政官ポール・ラクロワは、真理と神と科学の関係について話し合う。また、サンバとサンバの父は、仕事と神の関係について対話する。そして最後に、フランス人のプロテスタントの牧師ポール・マルシャルが、「物質主義の西洋」に対抗する「精神の西洋」を体現していることをあきらかにしていく。

第2章第5節では、共存と死のテーマについて論じる。まずは、2つの文化の統合に関するさまざまなテーマについて分析し、この小説には対立のテーマだけではなく、それと同じくらい強い共存への意志が託されていることを指摘する。ここでは先行研究に従って小説に現れる共存への意志を確認した後、一神教のイスラームとイスラーム以前の文化の統合が描かれている部分に注目する。そして、シェク・アミドゥ・カーヌ本人の見解を、インタビューを通して確認することで、カーヌ自身が抱く異文化の統合と人類共存の意志を理解する。最後に、『あいまいな冒険』のなかの各登場人物が体現する共存の意志をあきらかにしていく。

次に死のテーマについて分析する。まずは、『あいまいな冒険』のなかで繰り返される死のモチーフについて考察する。つづいてサンバの死を自殺とみなす考えを分析する。そして、サンバを殺した阿呆の役割について分析した後、先行研究の論評から、サンバの死に関するさまざまな視点を指摘する。

第3章では、カーヌの2作目である『寺の番人』を分析する。

第3章第1節では、小説の出版までに30年の歳月が必要であった理由と、『寺の番人』という題名の意味について、カーヌの証言を参照しながら解き明かす。

第3章第2節ではまず、この小説の登場人物を、小説のなかに登場する順に説明する。その際、人物の説明、性格、役割を一覧表にして示す。つづいてこの小説の構成と内容を説明し、最後にまとめとして考察を述べる。

第3章3節では、この小説に描かれているアフリカの歴史を取り上げる。カーヌの両小説はどちらも、歴史的感覚に貫かれている。本節ではサハラ以南の古王国、奴隷貿易、植民地支配、独立への戦い、パン・アフリカニズム、国民投票、内政自治時代、国家建設、アフリカ人の大量死の歴史について解説する。

第3章4節では、『寺の番人』に描かれている対立のテーマを分析する。はじめに、アフリカと西洋の文化的な相違について描写された箇所を解説する。まずそれは、食事の仕方のちがいに関する対話に表されている。次に、アフリカ人エリートの葛藤について書かれているところを分析する。そして、女性に対する美の基準について描かれている箇所にも触れる。

次に、アフリカ国内の対立、すなわちアフリカ人对アフリカ人の対立に関する描写を取り上げる。まずは、文化的な対立である。この対立は、セヌア人という少数民族の葬儀方法に由来しており、アニミズムと一神教の対立とも言える。その後、政治的な対立の分析が続く。この作品では、国内の改革派と保守派の対立、アフリカの資源を巡る関係、政府の独裁的支配と民衆、労働組合の関係についての描写がつづく。それは、独立を果たしたけれども植民地の傷も引き継ぐ新しい国家の建設の苦しみであり、旧宗主国が経済的、軍事的権益を維持し続ける新植民地主義の姿でもある。

第3章第5節では、共存のテーマについて論じる。はじめに、アフリカと西洋の文化的共存の描写に注目する。それはまず、仕事のやり方に表れる。次にイスラームの教師チェルノ・サイドゥ・バリの考えを分析する。彼は、物と人間の関係について述べる。彼の考えは、精神と物質を対立させるのではなく、見事に共存させるものである。最後に、アフリカ人エリートの共存への役目について叙述されている箇所を分析する。アフリカの精神を守り、西洋からは物質的なものだけを取り入れることが、アフリカの文化と西洋の文化の共存の最もよい形であるという考えがうかがえる。

次に、国内の文化的共存に関する描写を取り上げる。それはまず、「冗談関係」に基づいた共存である。さらにここでは、異文化の理解の仕方を鏡に映る姿にたとえている。鏡の向こう側に立って異文化を理解するという態度により、人々が兄弟姉妹として共存していく方法が示される。

より具体的な政策的な文化共存にも注目したい。政策的にアフリカの手法と西洋の手法を組み合わせ、2つの文化の共存を図れば、よりよく発展していけるのだという意志が、小説のなかでは農業政策として表されている。

最後に、登場人物が表す共存の姿を描写している箇所を分析する。サリフは、パリで農学を修めたエリートである。セヌア人の文化を理解し、それを農業政策に生かし、科学技術も使って収穫高をあげたのは彼である。ダバ・ムバイは、グリオ（語り部）の家系の生まれであり、同時に、フランスの高等教育で資格を取った歴史学の教授である。それは、アフリカの方法と西洋の方法の両方からアフリカの歴史にアプローチすることを表しており、口承文化と書記文化の共存である。モリコ將軍は、独立後に作られた国民軍の参謀総長である。彼は軍部の

頂点の地位にしながら、民衆の示威行動によって政権が脅威にさらされたとき、それに乗じてクーデターを起こさず、それどころか、大統領と民衆の架け橋となって暴力を使わずに暴動を治める。最後に、7人の民衆代表と大統領の対立とその後の和解に、共存への希望を読み取る。最終章では、上記のモリコ將軍によって、民衆の代表7人が集められる。この最終章においてとりわけ重要なことは、国家の権力者と国民との和解の可能性を示したことである。そしてこの場面は、時代を先取りしていた。インタビューにおけるカーヌの言葉から、そのことを示したい。

以上、作家自身と彼の2つの作品の分析により、シェク・アミドゥ・カーヌがアフリカの近代化経験の苦悩と希望をいかなる形でわたしたちに提示しているかがあきらかになるであろう。

論文審査の結果の要旨

本論文は、セネガルの作家シェク・アミドゥ・カーヌを研究対象とし、彼の作品『あいまいな冒険』(1961)と『寺の番人』(1995)の分析を通して、作家であり政治家でもあるカーヌが、いかにアフリカ固有の文化と西洋化の波の狭間で苦闘し、乗り越えようとしたかを論じたものである。

全体は三章から成り、まず第一章でカーヌの経歴や出自について述べ、特に彼の出身の地域がイスラームのスーフィズムと深い関係にあることを指摘している。第二章では『あいまいな冒険』、第三章では『寺の番人』に焦点をあてて、各々の作品の構成やテーマ、描写、登場人物を中心に説明し、先行研究を踏まえながら、イスラームの教育とフランス式の教育の対立、人間と神との関係についての対立、食事の仕方に象徴されるアフリカ文化と西洋文化の対立、アフリカの中での文化的・政治的対立がある一方、それらが共存への意志によって融合し、『あいまいな冒険』では主人公の死による昇華へと、『寺の番人』では現実の政治世界における権力者と国民との和解へと至る過程を丹念に論じている。

従来はほとんど知られていなかったアフリカの作家を取り上げ、関連の研究書・論文をすべて参照しただけではなく、作家の生まれ育った土地に赴いて資料を収集したことは高く評価できるし、研究に対する情熱も論文全編にわたって感じられる。一方で、カーヌという作家にのめり込むあまり、同時代のアフリカの作家や知識人との比較という観点がないために、作品のどこまでがカーヌ個人のものであり、どこからがより普遍的なものにつながるかの検証がされていない。今後はより広範な視野からの研究が望まれるところである。

欧文の日本語訳が直訳調でこなれておらず、また記述が論文というよりも研究ノートになる箇所が見られるが、必ずしも本論文の価値を損なうものではない。

以上のことから、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認められる。